

2015年 冬号

第88号

僧伽編集委員会

〒921-8031
金沢市野町2丁目32-4
徳法寺内
TEL (076) 241-5219
題字 本多 千翠

僧伽

煩は、みをわずらわす。
悩は、こころをなやますという。

『唯信鈔勝文意』



高山寺蔵『鳥獣人物戯画』

『唯信鈔勝文意』

法然上人門下の兄弟子である聖覚法印が書かれた『唯信鈔』を親鸞聖人が注釈したもの。

自身を俯瞰する

徳法寺 杉 谷 浄

昨年秋に、京都の国立博物館で高山寺所蔵の「鳥獣人物戯画」が展示されました。平安時代から鎌倉時代にかけて描かれた、日本最古の漫画とも言われるこの作品は、甲乙丙丁の全四巻にわたり、その長さは四十メートルを超えます。特に、ウサギやサル、カエルなどが擬人化されて描かれている甲巻は誰もが眼にしたことがあると思います。絵画としても素晴らしいものですが、そこには芸術作品には決して描かれることのない、当時の人たちの生活の様子が生き生きと描かれています。的あてや腹相撲、首相撲といった遊びや、博打で丸裸にされた男とその後で泣く女など、今の日本には無いものから変わらぬものまで、実に多くの情報が詰め込まれています。

その中に、明らかに僧侶を茶化している場面が数箇所あります。上の絵はその一つです。恰幅のいい着飾った僧侶が、とても仏とは思えないものに向って読経して

います。その後には、笑いながら読経している僧侶と、居眠りをしているように見える僧侶が座り、さらにその後には泣いている人たちがいます。これは鎌倉時代に描かれた丁巻の絵ですが、この元画と思われるものが平安時代に描かれた甲巻にあります。こちらではカエルの仏に対してサルの僧侶が読経し、後にウサギとキツネの僧侶がいます。他にも、沢山の供物をもたらってほくそ笑むサルの僧侶の絵などもあります。

この絵を寺宝として伝えている高山寺は、ひたむきな仏教への思いを生涯貫き通したことで知られる、親鸞聖人と同時代の僧、明恵上人の寺として知られています。日々の生活に追われて、本来の目的を見失うことなく、常に初心を忘れないためには、このように自分自身を俯瞰するような視線が大切になります。これは、自分に対する陰口を大切にすることがいわれた、蓮如上人の言葉にも通じるものがあります。

徳田 茂



心をやわらかにして

ひまわり教室には、医療的ケアを必要とする子ども含めて、かなり障害の重い子どもが通っています。これは、一九七四年にスタートして以来の「伝統」と言えます。この「障害」の重さについては一応の基準があります。が、社会のものさしはそれとは違うようです。以前は、今から思うとけっこう障害の軽い子が「障害が重いから」という理由で、保育所や地域の学校に入れてもらえないことがありました。最近では、そういう子どもも保育所へ入れるようになっていて、その意味では社会の

受け入れの幅が広がったと言えそうです。

ところで僕は、日頃子どもの診断名や障害の程度については、全くと言っていいほど無頓着です。他の職員も同様です。AちゃんがいてBちゃんがいて、CちゃんがいてDちゃんがいる。それでいいわけです。Aちゃんは絵本が大好きで、次々と本棚から絵本を出しては、パラパラとめくっている。Aちゃんの周りには本の山。Bちゃんは歩くことができないようになったばかりで、

おぼつかない足どりであつちへ行ったりこちへ行ったり。時々ドスンとお尻から落ちて、しばらくしてまた立ち上がる。

Cちゃんは大きな音や声に怖くて、他の子や大人たちがノリノリになると、Cちゃんの顔がひきつってしまふ。

Dちゃんは足腰がしつかりして、高い所に上るのもお手のもの。走ったり跳んだりも大好きで、心も体はずんずん。

いろいろな子がいて、それぞれに好きなことがあり、苦手なことや怖いことがあり、それぞれに現在取り組んでいる課題がある。私たちはそうしたことのひとつひとつを気にかけながら子どもたちと遊び、食事や排泄の指導や介助をしながらの日々です。そんなわけで、子どもの診断名や障害の程度は全くと言っていいほど気になりません。

ところがおもしろいことに、僕の話の聞いた教室

を訪れたりする人の多くは、子どもの「障害名」や「障害の程度」を知ろうとします。「あの子は、なんという障害ですか」とか「その子は、どの程度の遅れがあるんですか」とか。その子自身のことをよく理解するということよりは、外側からながめて、レッテルを貼るようにして子どもたちを捉えようとしてます。

診断名を聞いても、その子自身のことについて、本当は何もわかりません。でも多くの人は、それを聞きたがります。知りたがりです。自分のものさしを使って子どものことを捉えたいようです。そうしないと落ち着かないのでしょうか。

他方僕は、その子自身を理解しようと努めた結果、その子のことを全てわかって落ち着いているかと言えば、決してそんなことはありません。むしろ、一人ひとりの子どもについてわからないことだらけです。僕がもし、他の人たちと違う

としたら、「その子のことを十分にわからない」ということに対して、さほど不安を覚えずにおれることかもしれません。

AちゃんやBちゃんのことを一〇〇%わかっているから安心して付き合っている、というより、「子どもはみんな謎の存在」「そもそも他人のすべてをわかるはずがない」といった思いで子どもたちと過ごしています。いずれにしても、安易にこちらのものさしで子どもを云々することだけはしないで、おこう。なるべく心をやわらかにし、目の前の子どもとの世界を共感的に理解しよう。それが、僕の子どもの付き合い方で、それはけっこう楽しいものです。

プロフィール

一九四七年、石川県に生まれる。金沢大学文学部卒(心理学専攻)。障害児通園施設「ひまわり教室」前代表。「白山野々市つながりの会」代表。「障害児を普通学校へ・全国連絡会」代表。

和讃に学ぶ

第四十五回

徳法寺 杉谷 浄

星占い

今回の表紙に高山寺の「鳥獣人物戯画」のことを書きましましたが、京都国立博物館で開かれていたこの展示

に、高山寺の寺宝の一つとして、重要文化財に指定されている『梵天火羅圖』（玄証筆 一帖）がありました。実はこれは密教の占星術が記されているものなのです。月・火・水・木・金・土・日の七曜（曜とは光り輝くものという意味で、ここでは月と太陽を含めた星を指します。現在の曜日はこの由来しています）に羅睺（ラーフ）と計都（ケートゥ）という二つの架空の星を加えた九曜と、北斗七星の真言などが書かれています。ちなみに、先勝・友引・先負・

込まれていたのです。これに対して、明恵上人と同じ年の生まれである親鸞聖人は次のような和讃を残しています。

五濁増のしるしには

この世の道俗ごとく外儀は仏教のすがたにて
内心外道を帰敬せり

かなしきかなや道俗の

良時吉日えらばしめ

天神地祇をあがめつつ

卜占祭祀つとめとす

ここに「道俗」とは僧侶と一般の人という意味です。この世が濁ってしまった印として、仏教の僧侶やその信徒が、表向きは仏教を信じているようでも、内心は外道に帰依している。その証拠として、日にちの良し悪しを神々に手を合わせることを日課にしています。占いの歴史は古く、お釈迦様も問題にしていました。

お釈迦様の時代に活躍した六師外道といわれる宗教家の中の一人に、マツカリ・ゴーサーラがいます。彼を祖とするアーjeeヴィカ教は、バラモン教やジャイナ教、仏教などと並ぶインドを代表する宗教でした。万物は宇宙を支配する原理によつてあらかじめ定められおり「人間の努力は無駄である」という宿命論を説いています。その定められた

宿命を読み解くために占星術が用いられていました。お釈迦様はこの教えを最も危険で下等であると断じてしては衰退してしまいました。占いとして世界に広がっています。

仏教がインドで衰退して行く中で、次第にバラモン教と混ざり合い密教が生まれます。この時に占星術も取り込まれます。空海によつて密教が日本に伝えられると、占星術は仏教の一部として盛んに用いられる

ようになりました。明恵上人はこれを受け入れましたが、親鸞聖人は占いを仏教とは相容れない外道として否定したのです。インド占星術そのものは定着するとはありませんでした。「前世からの約束」という言い方で、この宿命論の教えは仏教に混入することになります。親鸞聖人の憂いは今も尽きることがないように

杉谷浄の

ラジオ案内

二月三日(火)

三月三日(火)

四月七日(火)

五月五日(火)

F M N I (七十六・

三MHz)で午後一時半

から一時間放送します。

番組名は「生活一番シャ

トル便 住職のよもや

ま話」です。再放送は放

送日の週の土曜朝六時

からです。インターネッ

トでも聞けます。

本の紹介

『流星ワゴン』

重松 清 著

講談社文庫

六九五円

重松清は、近年、高校入試の現代文の出題率ナンバーワンと言われている作家だ。『とんび』（堤真一主演）というドラマを、以前テレビで見たことがある。父と子の半生を描いたものだったが、妙に記憶に残るものだった。

そしてここに紹介する『流星ワゴン』も、父と子を描いた作品である。私はこの二つの作品の作者が同一人物であることに、今でも少し違和感を感じている。『とんび』は、どちらかと言うな父と息子の人生をリアルなタッチで描いたものであった。一方、『流星ワゴン』はタイムスリップを駆使した、『世にも不思議な物語』

的な小説である。

この作品には三組の父子が登場する。主人公である永田一雄と父・忠雄、一雄と息子の広樹。もう一組は、橋本と呼ばれる男と、その息子・健太。

実は、最後の父子は、すでに事故で死んでいるという設定だ。橋本は、家族でドライブに出かけることを夢見て、中年になってから無理をして車の免許を取った。しかし初めて出かけた信州の観光道路で事故に遭い、二人はあつけない最期を遂げる。しかし橋本父子の霊はいまだ成仏できずに購入したワゴン車（オデッセイ）とともにさまよっているのだ。

一方、主人公永田一雄は、リストラされ、家庭も崩壊寸前の、さえない三十八歳の中年男である。さらに彼には癌で死にかけている父・忠雄がいる。もともと父が苦手だった一雄は、当然、父に近況を素直に話せない。ただ自ら命を絶つこ

とを考えながら、悶々とした日々を送っている。

そんな一雄の前に橋本父子の乗ったワゴン車が現れる。なぜだか彼らは一雄の身の上をすべて知っていて、一雄を大切な場所に送り届けてくれるという。それは、一年前の東京の雑踏の中だった。思えば、そこは確かに、彼の運命の歯車が狂い始めた分岐点ともいえる時と場所だった。

そしてそこに現れたのは、驚いたことに、何と、一雄と同年の、三十八歳の父・忠雄だった。もともと父は裸一貫で事業を立ち上げた、気骨あふれる人物で、一雄とは正反対の性格であった。そんな父が自らを「チュウさん」と名乗り、一雄の力になつてくれるという。

そこから、一雄の壊れかけた人生の、もつれた運命の糸を解きほぐす道のりが始まるのだが……ここに重松が主人公に語らせた独白がある。少し長いが紹介したい。

三十八年生きてきて、数えきれないほどの人に出会い、いくつもの……ときにははがんじがらめにされてしまふほどたくさん、関係を結んできたのに、最後はひとりぼっちだった。そばには誰も残らなかった。」

これこそが、重松作品に通底する人生観なのだと思う。人は一生のうちによくの人と顔を合わすのだが、それは単に目の前を通り過ぎていくにすぎない。そこには出会いたくても出会えない人間の悲しみがある。もし本当に出会いたいのならば、時間を逆行させるしかないのかもしれない。たとえば、それが、父と子という最も身近な人間どうしの関係だったとしても。

*** **

今年も年末を迎え、年忌のお知らせを配り始める。来年平成二十七年は、何々様の何回忌ですというお知らせだ。今まで多くの人をお見送りしてきた。寺の住職という仕事もつくづく因

果な仕事だと思ふ。私の目の前に多くの人が現れ、去つていった。果たして自分は何れほどの人と出会うことができたのだろうか。ちなみにこの『流星ワゴン』は、来年一月からドラマ化される予定だ。主人公の一雄を西島秀俊、父・忠雄を香川照之が演じるという。かつて、サスペンスドラマ『ダブルフェイス』で、刑事とやくざを演じた二人の名優が、どんな演技を見せてくれるか今から楽しみだ。

(彰)



真宗人物伝 第三十六回

徳法寺 杉谷 浄

無為信 (無為子)

今回は親鸞聖人の弟子で、関東二十四輩の第十一番である無為信です。

無為信は、現在の福島県である岩代国会津郡柳津に生まれ、俗名は武田信勝であったといわれます。稲田で親鸞聖人の弟子となり、親鸞聖人が京都へ戻られた後に、会津門田一ノ堰に無為信寺を、奥州宮城郡(現在の宮城県)に称念寺を建立したと伝えられています。

無為信が亡くなった後に、無為信寺は磐城国(現在の福島県) 棚倉藩主内藤家に請われて、一ノ堰から棚倉に移りますが、内藤家が駿河国(現在の静岡県) 藤枝に転封となったために、無為信寺も一緒に藤枝

に移ります。さらにその後、京都六条に移りますが廃寺となってしまいます。江戸時代になって新潟に再興されますが、寺が転々とした上に一旦廃寺となつてしまつたため、多くの伝承が途絶えてしまつたと思われます。

なんとも不思議なのがこの法名です。ほとんどの戒名や法名は漢字二文字です。「無為」とは、仏教で生滅したり変化したりしない永遠絶対の真実をあらわす言葉で、常に変化し続ける「有為」の反対語です。ですから「無為」を「信」ずるといふ法名は、意味としてはおかしくは無いです。

ところがもう一つ別の名前が彼にはあります。それが「無為子」です。実は道教にも「無為」という言葉があります。それは自然のままという意味で「無為自然」といいます。これは「道」と並んで重要な老子思想で、『老子』の中に頻りに登場しています。彼が親鸞聖人の弟子であると同時に、道教の道士であつたとしたならば、最後に「子」の付く名前も三文字の法名も領けます。

もちろんこれは推論にすぎませんが、親鸞聖人の弟子には修験道の行者もいたといえますから、道教の道士がいたとしてもおかしくはないと思います。逆に親鸞聖人が、宗派意識にとらわれず、様々な人たちと交流をもつていたとしたならば、それはすばらしいことであるように思います。

いずれにしても、この無為信の寺が、真宗の歴史から一度消えたことで、真実はわからなくなつてしまいました。今は福島県の会津に「無為信」という名前

の日本酒があるそうです。一杯飲みながら消えてしまった歴史のパズルに思いを馳せるのもいいかもしれません。



徳法寺の

ホームページの

「案内」

「僧伽」のバックナンバーや報恩講、春秋彼岸の案内、お講の案内、学習会のレジュメ、交流広場などを載せています。アドレスは <http://tokuhou-ji.com/> です。是非覗いてみてください。

平成二十七年

年忌法要の御案内

- 一周忌 平成二十六年死亡
- 三回忌 平成二十五年死亡
- 七回忌 平成二十一年死亡
- 十三回忌 平成十五年死亡
- 十七回忌 平成十一年死亡
- 二十五回忌 平成三年死亡
- 三十三回忌 昭和五十八年死亡
- 五十回忌 昭和四十一年死亡

映画の紹介

『あなたへ』

先ほど『流星ワゴン』の紹介文を書き上げたばかりだ。(だから先にそちらを読んでいただけではありません。この高倉健の最後の主演作品も、すでに紹介した重松清の小説と同一のテーマを扱っているように思えてならない。

ここでは、それが夫婦の物語として語られている。富山で刑務所の指導教官を務める倉島英二に、亡くなった妻・洋子からの絵手紙が届く。そこには「故郷の海に散骨して欲しい」と

いう洋子の想いが記されていた。

その真意を知るための英二の旅が始まる。富山から始まり、飛騨高山、京都、下関、北九州市、…そして妻の故郷長崎県平戸の漁港・薄香までの一人旅である。それはまた自分の手で改装した、ワゴン車での旅であった。

風光明媚な地で出会うさまざまな人々と、さまざまに人生。出会いと別れ。そしてそれは英二が洋子の深い愛情に改めて気付かされる旅でもあった。

こういう旅を題材にした映画を、ロードムービーという。そういえば、『幸福の黄色いハンカチ』も、北海道を舞台にしたロードムービーだった。

話である。人に出会うために、人は旅を続けなくてはならない。これは人生における永遠のテーマなのだろう。

もちろん、英二の車は、流星ワゴンのように、タイムスリップするわけではない。しかし、いつか二人で旅に出るために英二が念入りに改装を重ねてきた車である。つまり、妻の故郷を尋ねる英二の旅は、妻の人生を逆にたどる二人連れの旅に他ならないのだ。それは時空を超えた旅と言えるのかもしれない。

この映画では、妻役の田中裕子をはじめ、佐藤浩市、長塚京三、浅野忠信、草薙剛、綾瀬はるか、ビートたけしなど、日本映画を代表する豪華な顔ぶれが名を連ねている。彼らが名優・高倉健の最後を見送っているように見えてしまうのは、私一人ではないだろう。そして、その中に、すでに二〇一二年に亡くなった名脇役、大滝秀治の名のあることも見逃せない。

このみちや
いくたりゆきし
われはけふゆく

これは英二が旅の途中で偶然出会う、種田山頭火作の俳句である。

森沢明夫原作。二〇一二年、降旗靖男監督作品。

(彰)

◎春彼岸

西尾賢一木工展
三月十八日(水)～
二十四日(火)まで

◎春彼岸中日及び

永代経法要
三月二十一日(土・祝日)
午後二時より
講師 藤原 正洋氏

各寺のご案内

◆常徳寺

金沢市寺町
五丁目一番二九号
TEL 二四一―二六四九

◆徳法寺

金沢市野町
二丁目三二―四
TEL 二四一―五二一九

◎お講 (石坂同信会主催)

毎月二十一日
午後七時半より
講師 三月 杉谷 浄
四月 細川 公英

* 一月・二月は天候が悪いのでお休みします。

編集後記

なんだか今回の私の原稿には、ドラマの題名や俳優の名前がやたら多く出てきました。別に年末年始にテレビドラマを見ることを推奨しているわけではない。「供養」ということの意味を、読者の皆様と一緒に考えたかったのである。年末というのは、なぜか人を神秘的な気持ちにさせるから不思議だ。来たる二〇一五年が、皆様にとつて素晴らしい年であることを。

(彰)

